

J.S.Bach

Kantaten

BWV 18,187,78,182

2008.6.1

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
代表 茂木 容子

本日は盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会“珠玉のカンタータ”～バッハからの贈り物～にご来場いただき、誠にありがとうございます。会員を代表いたしまして心よりお礼申し上げます。

私共の合唱団「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」の名前は「盛岡にてバッハのカンタータを愛する仲間」というような意味です。指揮者の佐々木正利先生によれば「フェラインは間違っただイツ語読みである。正しくはフェアアインだ!」とのこと。30年余りこの名前を使って来た私共の無知はお恥ずかしい限りですが、ここまで来ると変えることは難しいかもしれません。しかしながら、「カンタータを愛する気持ち」については「間違いなく」全員が同じ気持ちと断言できると思います。

私共はここ10年ほどJ.S.バッハの四大宗教曲（口短調ミサ、マタイ受難曲、クリスマス・オラトリオ、ヨハネ受難曲）の演奏を中心とした活動をしてまいりましたが、それらの曲の魅力や偉大さにいつも感銘を受けています。そして敬愛するヴィンシャーマン先生や、親愛なるシュマルフス先生、そしてマーラーの「復活」を指揮した飯森範親先生のご指導の下、それぞれの音楽に心躍る幸せな時間を過ごしてきました。しかし、次の企画を考えるため、会員に数回とったアンケートの中に、かなりの割合で「佐々木先生の指揮でカンタータを歌いたい。」という意見があったのです。そのとき、やはり私共の活動の根幹はバッハのカンタータだと実感しました。

今回は久しぶりにその企画実現の機会を得て、会員一同楽しんで練習をしてまいりました（もちろん、佐々木先生のとてもしっかりご指導はありましたが、それがまた楽しみでもありました）。器楽を演奏してくださる東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、コンサートマスター蒲生克郷さんをはじめとする、佐々木先生とは「同じ釜の飯を食った仲間」とそのお弟子さんたちで構成されています。さらに声楽ソリストは全員当合唱団会員であり、佐々木先生の弟子でもあり、東京はもとより遠くは鳥根から駆けつけてくれました。本日は指揮の佐々木先生をかなめに集ったメンバーがステージに立ちます。カンタータを「バッハからの贈り物」として客席の皆さまにお届けできますよう、メンバー全員切に願っています。どうぞ、最後までお楽しみください。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会
珠玉のカンタータ ～バッハからの贈り物～

J.S. バッハ Johann Sebastian Bach

カンタータ第 18 番『雨や雪が天から降るのと同じように』

Kantate Nr.18 "Gleichwie der Regen und Schnee vom Himmel fällt" BWV18

カンタータ第 187 番『皆あなたを待ち望んでいます』

Kantate Nr.187 "Es wartet alles auf dich" BWV187

カンタータ第 78 番『イエスよ、あなたは私の魂を』

Kantate Nr.78 "Jesu, der du meine Seele" BWV78

カンタータ第 182 番『天の王よ、歓迎します』

Kantate Nr.182 "Himmelskönig, sei willkommen" BWV182

独 唱

Kantate Nr.18

2&3.Recitativo
3.Recitativo
4.Aria

バス 小原 一穂
テノール 西野 真史
ソプラノ 村元 彩夏

Kantate Nr.78

3.Recitativo & 4.Aria
5.Recitativo & 6.Aria

テノール 鏡 貴之
バス 佐々木直樹

Kantate Nr.187

2.Recitativo
3.Aria
4.Aria
5.Aria
6.Recitativo

バス 阿部 学
アルト 谷地 晶子
バス 千田 敬之
ソプラノ 小原 育世
ソプラノ 田村いずみ

Kantate Nr.182

3.Recitativo & 4.Aria
5.Aria
6.Aria

バス 佐藤 和久
アルト 中野 和子
テノール 及川 豊

指 揮

佐々木 正利

管 弦 楽

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

オルガン

剣持 清之

合 唱

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

2008.6/1 盛岡市民文化ホール 大ホール

主 催 / 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後 援 / 岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、盛岡市文化振興事業団、岩手県合唱連盟、

岩手日独協会、岩手日報社、盛岡タイムス社、NHK盛岡放送局、

IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ

プロフィール

佐々木 正利 (合唱指揮)



東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元（声楽）、服部幸三（音楽学）、小林道夫（演奏法）、森品彦（発声法）、松本民之助（作曲）、岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。

1973年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡りL.フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライブツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H.クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP.シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名なオーケストラのソリストとして度々起用され、K.マズア、H.シュタイン、H.プロムシュテット、小澤征爾、岩城宏之等、世界を代表する数々の

指揮者と共演。また世界的宗教音楽の名指揮者であるH.リリング、H.J.ロツチュ、M.コロボ、R.ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を得ている。

特に世界的バッハ指揮者H.ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステン演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1985年ザルツブルク音楽祭に招聘され、モーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊とバッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」を共演し好評を博した。在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、コジ・ファン・トゥッテのフェランド、フィデリオのヤッキノ、スカララッティ・グリゼルダのコラーード役で出演。現在までリサイタル26回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後約30数年に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての10度にわたるドイツ公演では、『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴィンシャーマンとのマタイ受難曲では『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ.ツィルヒとの天地創造では『音楽と言葉の見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。

1987、88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen.マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。

1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られ、また2000年にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。

現在岩手大学教育学部教授。二期会会員。日本声楽発声学会、日本音楽表現学会、日本発声指導者協会、仙台バッハ・アカデミー、各理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団、東北大学混声合唱団、東京21合唱団、岩手大学合唱団、各指揮者。山形交響楽団合唱団音楽監督。二期会バッハ・バロック研究会講師。

声楽ソリスト プロフィール

ソプラノ



小原 育世

盛岡市生まれ。岩手大学教育学部音楽科卒業、同大学院教育学研究科音楽教育専修修了。佐々木正利、佐々木まり子の各氏に師事。H. クレッチマー、A. ギーベル、C. ハンペ、K. グラーフ、川崎操、K. ヴイトマーの公開レッスンを受講。88年には仙台バッハ・アカデミー音楽礼拝にてバッハのソロカンタータ第51番をH. リリングの指揮で演奏。レクイエム、カンタータ、受難曲等のソプラノソロをつとめる。また、ベートーヴェンの第九、オペラ「サラダで元気」「ツエねずみの友だち」(長谷川恭一)等に出演。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グループ・ベッヒライン、仙台バッハ・アカデミー協会各会員。盛岡市立仙北小学校教諭。



田村 いずみ

岩手大学教育学部小学校教員養成課程卒業。同大学院教育学研究科音楽教育講座声楽専攻修了。声楽を佐々木正利氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、ソプラノパートリーダー。これまでに岩手大学合唱団定期演奏会や同海外公演(アムステルダム・コンサートヘボウ)、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会、仙台宗教音楽合唱団演奏会等で度々ソロを受け持ち好評を博す。現在オープン化粧品㈱に勤務。



村元 彩夏

岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京芸術大学音楽学部声楽科を経て、現在同大学大学院声楽科独唱専攻1年在学中。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生の各氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブ、東京21合唱団に所属。

アルト



中野 和子

岩手大学卒業。東京芸術大学大学院修了。2004年バーゼル音楽院にてコンサートディプロム取得。2007年スコラカントルムバジリエンシスにてルネッサンス・バロック専攻修了、傑出した歌手であるとの評価を受ける。



谷地 畝 品子

盛岡北高等学校卒業。岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京芸術大学音楽学部声楽科を経て、現在同大学院修士課程独唱科2年に在籍。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、磯貝静江、朝倉蒼生の各氏に師事。これまでに第57回芸大メサイア、J.S. バッハの教会カンタータ、ミサ曲、「クリスマス・オラトリオ」、ハイドン「聖ニコライミサ」、ロッシーニ「小荘厳ミサ」等のアルトソロを務める。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、東京21合唱団、東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブに所属。

テノール



及川 豊

盛岡市出身。盛岡一高を経て岩手大学教育学部及び東京芸術大学音楽学部声楽科を卒業。声楽を小原一穂、故志田久子、佐々木正利、鈴木寛一の各氏に師事。C. カヴィーナ、P. コーイ、J. エルウイス氏のレッスンを受講。これまでに、シュッツ「クリスマス物語」、バッハ「クリスマス・オラトリオ」、モーツァルト「レクイエム」において、またバッハのカンタータやシュッツ、シャルバンティエ、カンブラ、ヘンデル、モーツァルトの宗教曲でソリストを務める。グレゴリオ聖歌や中世・ルネサンス期のポリフォニーの演奏会、録音にも参加。ヴォーカルアンサンブル・カベラ、古楽アンサンブル「コントラポント」、聖グレゴリオの家聖歌隊「ファヴォリット」各メンバー。横浜市在住。フェラインには1990年より参加、演奏旅行などではシュッツ、メンデルスゾーンのパートソロを務めた。



鏡 貴之

岩手大学卒業。東京芸術大学大学院修士課程修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ.S. バッハの作品では多数のカンタータのソロを務め活動の中心となっている。他にはモーツァルト「レクイエム」、「第九」、芸大合唱定期でブルックナー「テ・デウム」など。オペラではモーツァルト「魔笛」のタミーノ、僧侶、武士役。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、芸大バッハ・カンタータ・クラブ、東京21合唱団、日本発声学会、グループ・ベッヒライン、各会員。バッハコレギウムジャパン、メンバー。東京ムジーククライス、東京バッハ合唱団、各ヴォイストレーナー。



西野 真史

岩手県立盛岡第一高等学校卒業。岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。日本声楽発声学会、グルッペ・ベッヒライン各会員。現在、盛岡市立浜民児童館嘱託児童厚生員。

バス



阿部 学

岩手大学教育学部中学校教員養成課程英語科卒業。1996年岩手大学合唱団チーフコンダクター（学生指揮者）。盛岡バッハ・カンタータ・フェラインバスパートリーダー。グルッペ・ベッヒライン会員。岩手県立高田高等学校英語科教諭。



小原 一穂

岩手大学教育学部音楽科卒業、東京学芸大学大学院修士課程修了。森肇子、今関由紀子、中村義春、移川澄也、佐々木正利、P.フッテンロッハーの各氏に師事。H.クレッチマル、K.ヴィトマー各氏の公開レッスンを通じドイツ歌曲や宗教音楽の歌唱について研鑽を積む。バッハアカデミー修了演奏会に於いてH.リリングの指揮の下ヨハネ受難曲のイエス役を歌い好評を得る。バロック〜ロマン派にかけての宗教曲や第九のソリストを多数務める他、歌曲や創作オペラ、ミュージカルの分野でも活躍している。盛岡バッハ・カンタータ・フェラインコンサートマスター。グルッペ・ベッヒライン会長。盛岡市立城西中学校勤務。



佐々木 直樹

岩手大学教育学部音楽科卒業。東京学芸大学大学院修士課程修了。声楽を小原一穂、佐々木正利、佐々木まり子、故伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。J. S. バッハの数々のカンタータをはじめ、オラトリオ、受難曲、ミサ曲など、宗教音楽を中心にソリストとして活動している。2001年芸大定期演奏会メンデルスゾーン「エリア」のタイトルロール、2002年芸大メサイヤ公演のソリストを務める。2003年〜2006年、岩手大学教育学部音楽科非常勤講師。現在、鳥根大学教育学部芸術表現教育講座講師。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベッヒライン、日本声楽発声学会各会員。



佐藤 和久

岩手県立水沢高等学校 日本大学文理学部社会学科卒業 大学合唱団および東京コールフェラインに所属し合唱に親しむ傍ら、宮原卓也氏に声楽を師事。岩手県立高等学校教諭として採用後、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインに加入。

佐々木正利氏に声楽を師事。仙台バッハアカデミーマスタークラスでクルト・ビットマー氏のレッスンを受講。1996年盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会「バッハの夕べ」においてバッハのカンタータ131番のバスソロを務める。

グルッペ・ベッヒライン会員。現在、盛岡第三高等学校に地歴・公民科の教員として勤務。



千田 敬之

岩手県立水沢高等学校、神奈川大学経済学部経済学科卒業。岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修修了。声楽を佐々木正利氏に師事。

神奈川大学合唱団在籍中、多田武彦作曲「尾崎喜八の詩から・第二」初演ソリストをつとめる。第一回スーパー・クラシック・オーディション東北大会出場。釜石フィルハーモニックソサイエティーとの共演で「カルミナ・ブラーナ」バリトンソロをつとめる。盛岡芸術祭、岩手芸術祭に参加。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会にて、カンタータ106番のバスソロをつとめる。佐々木正利教授のオペラ講座に出演。近年有志と共に、小学校、中学校にて日本歌曲の訪問演奏を行い好評を博す。



オケ プロフィール

管弦楽コンサートマスター

浦生 克郷



東京芸術大学卒業。NHK-FM「夕べのリサイタル・新人演奏会」に出演。1976～78年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める傍ら、ヴェルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。帰国後は室内楽を活動の中心とし、憩弦楽四重奏団、東京バロックアンサンブル、東京バッハアカデミー、久合田緑弦楽四重奏団などで活躍する一方、東京芸大バッハカンタータクラブ、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、盛岡バッハアンサンブルの指揮者を務めた。1987～88年神戸女学院大学講師。

現在、東京芸術大学管弦楽研究部講師、及び同部（芸大フィルハーモニア）コンサートマスター、エルデーディ弦楽四重奏団第1ヴァイオリン奏者、アンサンブル of トウキョウメンバー。日立室内アンサンブル、水戸ジュニアオーケストラ、ひたちジュニア弦楽合奏団各指揮者。故多久興、海野義雄、故ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル（管弦楽）

東京芸術大学の学内サークルとして活動しているクラブ「東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブ」のOBを中心に、卒業後もなおバッハやヘンデル等の器楽曲、宗教音楽の分野に於ける演奏活動を続けようと有志が集ったのが「東京バッハ・カンタータ・アンサンブル」である。メンバーは各自がソリスト、室内楽、オーケストラ等、各方面で活動しているため多少流動的ではあるが、この名称のもとで演奏活動を始めてから既に20年を経て、バッハ、ヘンデルを中心としたバロックの器楽曲、宗教音楽の数少ない演奏研究団体として、その様式感にのっとりた生き生きとした演奏には定評がある。

過去においては、W. ヤーコブ、H. ヴィンシャーマン、E. ヴァイアント、H.J. ロッチュ、P. ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、CMA 合唱団等、全国各地の合唱団と共演している。

第1ヴァイオリン



磯田 ひろみ

東京芸術大学卒業、同大学院修士課程修了。日・塊文化協会オーディションに合格、奨励賞受賞。長江杯国際音楽コンクール第一位。フランツ・リスト音楽院サマーアカデミー、トリアー国際マスタークラス修了。芸大在学中バッハカンタータクラブに所属、小林道夫氏のもとで多くの宗教曲を学ぶ。弘前バッハアンサンブルのメンバーとしてこれまでにロシア、ヨーロッパ五ヶ

国公演に参加。カルテット・グラーツィアのメンバー。これまでにオーケストラとの共演、またリサイタルを開く。ゲルハルト・ボッセ、マルクス・ヴォルフ、岡山潔、松原勝也、篠崎史紀の各氏に師事。



清岡 優子

神奈川県出身。東京芸術大学を経て、同大学院修士課程室内楽科修了。現在、東京芸術大学教育研究助手、横浜市栄区民文化センター「リリス」レジデンス・アーティスト、芸術集団2008支援アーティスト、及び、NHK交響楽団アカデミー生。第10回日本クラシック音楽コンクール全国大会第3位（1位なし）。第3回Y. B. P. 国際音楽コンクール優勝。2003年、芸大シンフォニア英国公演のメンバーに選抜され渡欧。Duo Espoirとして、また、Quartett Kreisell、Quartett Stefflの第一ヴァイオリン奏者としても数々の演奏会に出演し、奨学金を受ける。現在、ハイドン弦楽四重奏曲全曲録音のプロジェクトに携わっている。2007年9月には小林道夫氏と、帯広・札幌にてDuoリサイタルで共演。



川上 裕司

東京芸術大学音楽学部器楽科を経て、同大学院音楽研究科室内楽専攻を修了。

第3回かやぶき音楽堂デュオコンクールにて特別賞を受賞。

現在は室内楽、その他のアンサンブル等を中心に多方面で演奏活動をしている。

第2 ヴァイオリン



花崎 淳生

東京芸術大学を経て同大学院修了。

1986年から87年にかけて、ドイツ、カールスルーエに留学。

'97年度「村松賞」、平成16年度文化庁芸術祭大賞、平成19年度文化庁芸術祭賞を古典四重奏団として受賞。

現在、「エルデーディ弦楽四重奏団」「古典四重奏団」「アンサンブルB W V 2001」メンバー。

エルデーディ弦楽四重奏団よりハイドン作品のCDを、古典四重奏団より「ベートーヴェン後期四重奏曲集」「バッハ・フーガの技法」等のCDリリース。井上武雄、日高毅、J.W.ヤーンの各氏に師事。



高木 聡

東京芸術大学音楽学部卒業。これまでにヴァイオリンを小沢真琴、岡山潔、和波孝禧、塚原るり子の各氏に、室内楽を小林道夫、金昌国の各氏に師事。1999年The International Holland Music sessions修了。第九回全日本ソリストコンテストにてベストソリスト賞受賞。東京芸術大学管弦楽部非常勤講師を勤めた後、現在はソロ、室内楽、オーケストラの他、バロックヴァイオリン奏者としても活躍中。



廣海 史帆

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。同大学院修士課程古楽科修了。第54回全日本学生音楽コンクール大阪大会高校生の部第3位。第22回古楽コンクール〈山梨〉第2位、併せて栃木蔵の街音楽祭賞受賞。2007年、パリ・シャンゼリゼ管弦楽団よりスカラシップを受け、サント・ヨーロッパ音楽アカデミーに参加。バッハ・コレギウム・ジャパン、オーケストラ・リベラ・クラシカ、レ・ボレアード等の演奏会に出演。これまでに、佐々木晶子、久合田緑、田中千香士、原田幸一郎、若松夏美の各氏に師事。

ヴィオラ



吉田 篤

山口県出身。第50回全日本学生音楽コンクール福岡大会第一位。東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、同大学大学院室内楽科ヴィオラ専攻修了。現在、東京芸術大学管弦楽研究部非常勤講師。「カルテット・アーニマ」ヴィオラ奏者。「コンツェントゥス・ムジクス東京」コンサートマスター。またタンゴヴァイオリニストとしても活躍、これまでに小松亮太氏、ウーゴ・パガーノ氏らと共演。「小松真知子&タンゴクリスタル」「Tango-jack」メンバー。



多井 かな

1981年奈良県生まれ。バイオリンを岩谷悠子、岡本智紗子、東京芸術大学にてピオラを菅沼準二、バロックバイオリンを若松夏美の各氏に師事。現在フリー演奏家。

チェロ



西沢 央子

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学器楽科を卒業。在学中はバッハ・カンタータ・クラブに所属し、小林道夫氏の薫陶を受ける。チェロをヴァーツラフ・アダミーラ、三木敬之、レーヌ・フラシヨの各氏に師事。また、オルガンを鈴木雅明氏に師事。現在、フリーランスのバロック・チェロ奏者として、日本の主要なバロック・オーケストラに数多く参加。また初期バロックを得意とするアンサンブル「メディオ・レジストロ」のメンバーとして、5弦チェロや小型のヴィオローネを用いてバス楽器の可能性を追求している。2002年、17世紀のイタリア、スペイン音楽を取録したCD「メディオ・レジスト」をリリース。「コレギウム・アルジェントゥム」「コントラポント」「ラ・バンド・サンパ」メンバー。



山本 徹

東京芸術大学を経て、同大学院古楽専攻を修了。チェロを土肥敬、河野文昭、北本秀樹、鈴木秀美の各氏に、室内楽を迫昭嘉、松原勝也、川崎和憲、木越洋、植田克己、鈴木雅明、若松夏美の各氏に師事。また部長も務めた東京芸大バッハカンタータクラブにて、小林道夫氏の指導のもと研鑽を積む。バッハ・コレギウム・ジャパン、オーケストラ・リベラ・クラシカなどのオリジナル楽器オーケストラに参加する一方、チャイコフスキーやショスタコーヴィチの協奏曲をオーケストラと共演するなど、オリジナル・モダン双方の分野で活動を展開している。2006年、第20回古楽コンクール（山梨）第2位。翌年には同コンクール委員会の推薦により、栃木・蔵の街音楽祭にてソロ・リサイタルを行った。

コントラバス



蓮池 仁

東京芸術大学卒業。桑田文三、永島義男に師事。学生時代はバッハ・カンタータクラブにて小林道夫の指導のもと、J.S.バッハの多くの教会カンタータの美しさに触れて過ごす。

この経験がのちのオーケストラ、室内楽、古楽活動の基礎となる。1990年東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団入団、現在に至る。これまでにH.リリング指揮日本バッハ・アカデミー（1983～85年）、ジョン・ミュンフン指揮アジア・フィル（1997年）、ジョシュア・リフキン指揮バッハ・コンチェルティノー大阪（2005年）などに参加。アンサンブル「音楽三昧」、アンサンブル〈BWV 2001〉各メンバー。

フルート



阿部 博光

1976年東京芸術大学入学。同年第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。在学中、日本フィルハーモニー交響楽団に入団。1980年東京芸術大学卒業。日本フィルでは首席フルート奏者を務める。1982年文化庁芸術家在外研修員として、スイス、バーゼルに留学。1984年より東京で10年連続リサイタルを開催、

好評を博す。1995年、17年間在団した日本フィルを退団。1998年札幌市民芸術祭大賞受章。1999年より札幌コンサートホールにて阿部博光室内楽シリーズを開催。2002年札幌文化奨励賞受章。現在、北海道教育大学岩見沢校芸術課程教授。同大学札幌校、札幌大谷大学、同短期大学の非常勤講師、HBCジュニアオーケストラの常任指揮者を務める。



阿部 礼奈

12才よりフルートを始め、HBCジュニアオーケストラ、札幌市立啓明中学校吹奏楽部に所属。第54回全日本学生音楽コンクール全国大会第1位。01年東京芸術大学付属音楽高校入学。第56、57回全日本学生音楽コンクール東京大会奨励賞。03年エマニュエル・バユ氏の公開レッスンを受講。第13回日本クラシック音楽コンクール第2位（高校部門最高位）。第10回びわ湖国際フルートコンクールアンサンブル部門第3位（1位なし）。

06年International Summer Academyに参加、フェリックス・レングリ氏に師事。07年日演連推薦新人演奏会で札幌交響楽団、東京芸術大学奏楽堂モーニングコンサートで芸大フィルハーモニアと共演。

現在東京芸術大学4年在学中、金昌国に師事。これまでに阿部博光、八條美奈子、細川順三、萩原貴子、神田寛明、斎藤和志、高木綾子の各氏に師事。

オーボエ



小畑 善昭

東京芸術大学卒業後、同大学院修了。第42回毎日音楽コンクール管弦楽部門第3位入賞。1979年より1982年まで東京交響楽団に在籍。のち、1985年まで西ベルリン留学。この間ベルリン・フィルハーモニー交響楽団のエキストラを務める。帰国後、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者をを経て、現在母校の教授として後進の指導に当たると、独奏及び室内楽、また古楽器奏者としても活発な演奏活動を繰り広げている。



岡 北斗

2002年愛知県立芸術大学卒業。05年東京芸術大学大学院修士課程修了。その後ベルリンへ留学。ドイツ国立ロストック演劇・音楽大学にて国家演奏資格取得。08年日本へ帰国。NHK交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、ジャパン・チェンバー・オーケストラ等の定期演奏会への出演及びCD録音、ラ・フォル・ジュルネ・ジャポン、アフィニス音楽祭等の参加をしている。これまでにオーボエを森田撰子、嶋崎耕三、渡辺潤也、小畑善昭、小林裕、O. ヴィンター、G. ヴィットの各氏に師事。

ファゴット



尾崎 奈々

札幌市出身。12歳よりファゴットを始める。2007年北海道札幌東高等学校卒業と同時に、東京芸術大学音楽学部入学。現在、同大学2年在学中。2004年ジュニア管打楽器コンクール ファゴット部門銀賞受賞。これまでに、ファゴットを村上敦、水谷上総の各氏に師事。室内楽を、四戸世紀氏に師事。

オルガン



劔持 清之

国立音楽大学卒業。チェンバロを西川清子、水野均、岡田龍之介の各氏に師事。

各地の演奏会に出演しバロック奏者との共演や、佐々木正利氏、岩城宏之氏、H. J. ロッチュ氏、H. ヴィンシャーマン氏指揮のバッハ「カンタータ」「短調ミサ曲」「ヨハネ受難曲」「マニフィカート」等の通奏低音で、アンサンブル経験を深める一方チェンバロソロ、デュオコンサート等で活動。フランス、ドイツ公演など海外でも演奏を行う。

盛岡大学短期大学部准教授。グルッペ・ベツヒライン副会長。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン (合唱)

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ. S. バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「言葉が生きる」と音楽が生きる」とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H. ヴィンシャーマン、H. J. ロッチュ、J. ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

2007年1月、盛岡においてH. ヴィンシャーマン指揮、バッハ「ヨハネ受難曲」を演奏し大きな感動を呼んだ。同12月には盛岡市民文化ホール開館10周年記念公演、飯森範親指揮東京交響楽団とマーラー「復活」、G. シュマルフス指揮による台湾初演バッハ「クリスマス・オラトリオ」に合唱団から有志が参加した。

鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター 佐々木 幹 雄

「珠玉のカンタータ」演奏会へようこそ！今日は、およそ300年ほど昔に、ヨーロッパのザクセン地方（現在のドイツ東部）でヨハン・ゼバスティアン・バッハによってつくられた4つの教会カンタータの演奏をお楽しみ下さい。

教会カンタータとは器楽伴奏つきの独唱や合唱曲で構成されている組曲で、ルター派教会の礼拝における「説教音楽」として作曲されたものの総称です。毎日曜に教会では礼拝が行われます。そこでは牧師が聖書について解説をしながら神の教えを説きます。その神の教えが教会に集った人々によく伝わるように、人々が心のより深いところにその教えを受け入れるように、そして主なる神を讃えると同時に主によって与えられた自分の「生」を全うするように…。そのためには言葉によって神の教えを「理解させる」ことに加え、音楽によってそれを「感じさせる」ことが効果的でした。このためルター派教会では礼拝に音楽を積極的にとり入れるようになりました。教会にはカントルと呼ばれる音楽監督を置き、聖歌隊の指導や楽器奏者の確保、教会カンタータの指揮のみならずそれらの音楽の作曲もその役目とされていました。また宮廷付きの教会の場合は宮廷楽団の楽師長がその役目を担って

いました。

バッハは生涯に300曲以上の教会カンタータを作曲した^[注1]との記録もあるのですが、現在は残念ながら200曲程度しか残されていません。その中から4つの教会カンタータを選んで演奏いたします。これらはバッハが住み勤めた別の2つの土地で作曲されました。

1685年に生まれたバッハは、1708年ミュールハウゼンの教会オルガニストの職を辞し、「宮廷オルガニスト兼宮廷楽師」としてヴァイマルに赴きます。それから6年後の1714年、29歳の彼は「宮廷楽師長」に昇格します。それに伴って毎月新作のカンタータを演奏する義務を負うようになりました。《雨や雪が天から降るのと同じように》BWV 18^[注2]は「オルガニスト」時代の1713年2月に、《天の王よ、歓迎します》BWV 182は「宮廷楽師長」の最初の仕事として、このヴァイマルで作曲されたカンタータです^[注3]。

1717年にヴァイマルの宮廷を離れケーテンの宮廷へと移ったバッハはそこに5年半ほどつとめ、1723年にライプツィヒに移ります。バッハ38歳の年です。ライプツィヒでは聖トーマス教会のカントルの役職に就きます。その職務内容は、教会付属の学校で生徒に音楽を教える教師の仕事と、ライプツィヒ市全体の音

[注]

- 1 バッハの次男と弟子による「故人略伝」によると、バッハは5年分のカンタータを残したとされています。1年分でおおよそ60曲ですから、この記述が正しいとすれば300曲ほどが作曲されたと考えられるわけです。
- 2 「BWV」とはJ. S. バッハの作品目録を意味する Bach-Werke-

Verzeichnis の頭文字です。W. シュミダーによって編集されました。ジャンル別に番号が整理されています。バッハ自身が自分の作品に番号をつけたわけではありません。

- 3 残されたカンタータのうちヴァイマルで作曲されたと考えられているカンタータは20曲程度です。



楽監督として聖ニコライ教会をも含めた2つの主要教会の音楽に関わることを監督することでした。このような大役に就いた最初の年、バッハは意欲的に教会カンタータを作曲します。教会暦にそったほぼ1年分のカンタータ60曲近く^[注4]を旧作の改変^[注5]などを交えて作曲し、2年目にはほぼ新曲のみで新たなカンタータ年巻を作り上げています。《イエスよ、あなたは私の魂を》BWV 78はこの2年目の年に、《皆あなたを待ち望んでいます》BWV 187はそのさらに2年後の1726年にトーマス教会で初演されています。

《雨や雪が天から降ると同じように》BWV 18はバッハが28歳になるころの作品^[注6]です。

歌詞は1711年に出されたハンブルクの牧師E. ノイマイスターの詩集^[注7]によっています。復活節前第8日曜日用のカンタータで、この日の説教^[注8]は「種を蒔く人」のたとえ^[注9]です。神の御言葉を種に、聞く人の種類を蒔かれる地に喩えて、「立派な善い心

で御言葉を聞き、よく守り、忍耐すれば実を結ぶ」という教えです。

このカンタータは作曲技法の特徴から「レチタティーヴォ研究」^[注10]と呼ばれています。第2曲と第3曲において、レチタティーヴォ様式を守りながらも驚くほど多彩な音楽を作りだしています。もちろんそれは、歌詞の内容を音楽化するためです。また編成も少々特徴的で、ヴァイオリンは用いられずヴィオラが4パートに分かれて演奏するようになっています。短い作品ながら、教えと祈りと願いに満ちたカンタータです。

第1曲 シンフォニア ト短調 6/4拍子

まるで雨や雪が降り続けている様子を表すようなヴィオラのユニゾン^[注11]で始まります。リトルネロ形式^[注12]をとり、繰り返される冒頭のユニゾンの音楽の間に2つのヴィオラが何度もソロを演奏します。

第2曲 レチタティーヴォ(バス)

- 4 毎日曜日など礼拝の機会のために作曲された1年分のカンタータを「カンタータ年巻」と呼んでいます。
- 5 たとえば楽器の編成を変えたり曲を加除したり「パロディー」と呼ばれる手法で作りを変えたりしていました。
- 6 バッハは自己表現として作曲したわけではなく、教会において神に捧げるものという意識で音楽を作っていました。ですから近現代的な意味での「作品」ではなく、あくまで単に「作られたもの」という広義の意味で「作品」という用語を使います。
- 7 Erdmann Neumeister (1671-1756)。レチタティーヴォとアリアというオペラの要素を教会に持ち込んだ新しいタイプのカンタータ歌詞集を書いたルター派の牧師です。教会暦5年分の歌詞集を書き、BWV18の歌詞は1711年の第3集から採られています。
- 8 教会暦における各主日の説教では、その日に読まれ説教される聖書の章句と書簡の章句が決まっています。それを「ペリコーペ」とよびます。
- 9 『ルカによる福音書』第8章第4～15節には次のように記されています。(番号は節を示します。)

4 大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話になった。5「種を蒔く人」が種まきに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。7ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。8また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。9弟子たちは、このたとえはどんな意味かと訪ねた。10イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、
『彼らが見ても見えず、
聞いても理解できない』
ようになるためである。」
11「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。12道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い



『イザヤ書』から採られた神の御言葉についての預言をバスが述べ伝えます。歌詞に応じた音型や「andante」といった曲想の明示などの工夫がされています。

第3曲 レチタティーヴォ(テノール、バス)と連祷(合唱)

前曲に応じてまずテノールが祈り、続いてM.ルター^[注13]による連祷がコラル風^[注14]に歌われることで一人の祈りが会衆の祈りとなります^[注14]。次にバスが悪魔からの防ぎを、続くテノールが迫害による墮落からの護りを、最後にバスが現世的な欲に迷わぬようにと祈り、それぞれに連祷が続きます。伴奏のありかたや音の跳躍、リズムの変化やメリスマ^[注15]の用い方など、実に多くの音楽的なアイデアが詰まっています。

第4曲 アリア(ソプラノ) 変ホ長調 4/4拍子

ドラマチックな前曲と対比的に登場するこのアリアは内省的で、神の言葉が蒔かれることで自分の魂が強くなれるということ、確かな足取りと喜びを

もって歌っています。

第5曲 コラル(合唱) ト短調 4/4拍子

簡素な4声体をもって共同体の祈りとして、神の御言葉によせる信頼を歌います。皆で信仰を確かめるようでもあります。

《皆あなたを待ち望んでいます》BWV 187はバッハが41歳の作品で、ライプツィヒにおけるカンタータ第3年巻の中の1つです。

歌詞は「ルードルシュタット詩華撰」^[注16]から採られています。三位一体後第7日曜日用のカンタータです。この日は「四千人に食べ物を与える」^[注17]というガリラヤの奇跡について説教が行われました。ですからキーワードは「食べる」ということです。私たちが手に入れる食物は全て神の恵みであり、それを食して生きることへの感謝の念が全体に貫かれています。2部構成をとり、前半は神への讃美、後半は内省となっ

去る人たちである。13石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。14そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。15良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

- 10 「レチタティーヴォ」とは、話しことばの自然な抑揚を模倣したり強調したりした様式で、「叙唱」と訳されています。
- 11 「ユニゾン」とは、いくつかの声部が同じ旋律を同時に演奏することです。
- 12 「リトルネロ形式」とは、ソロ(独奏)的な部分では自由に音楽が展開し、それと対比的にトゥッティ(総奏)部分では同じことを繰り返し、それらが交互に出現するといった音楽形式です。
- 13 Martin Luther(1483-1546)。宗教改革を起こしたドイツの神学者です。礼拝に音楽が大切だと考え、コラルを編集したり礼拝に音楽を積極的に採り入れたりしました。

- 14 「コラル」とは、ルター派教会における賛美歌です。バッハの時代もそして現在でも、教会に通っている人たちは耳にし歌い慣れている歌です。
- 15 「メリスマ」とは、1つの音節にいくつもの音符をつけて歌う様式です。同じ母音をずっと伸ばして歌います。
- 16 ルードルシュタットの宮廷カントルであるクリストフ・ヘルムによって書かれた歌詞集です。バッハはこの時期にこの「詩華撰」をもとに7曲を作曲しています。これらには、(1)二部構成、(2)第1部の冒頭は旧約聖書句で第2部冒頭は新約聖書句、(3)中間楽章のアリアとレチタティーヴォがシンメトリーに配置されている、といった特徴があります。
- 17 「マルコによる福音書」第8章第1～9節には次のように記されています。

1「そのころ、また群衆が大勢いて、何も食べるものがなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。2「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。3空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまうだろう。中には遠くから来ている者もいる。」4弟子たちは答えた。「こんな人里離れた所で、いったいどこから



ています。

音楽的には先ほどの《雨や雪が天から降るのと同じように》BWV 18とは趣が異なり大規模な合唱やアリアやセッコ・レチタティーヴォ¹⁸などがありますが、残されたバッハのカンタータの全体的な傾向からするとこちらのほうが一般的な構成と言えます。なおこのカンタータの第1,3,4,5曲は後に《小ミサ曲ト短調》BWV235に転用されています。

第1曲 合唱 ト短調 4/4拍子

第1部の開幕となるこの合唱は旧約聖書の「詩篇」第104篇第27～28節を歌詞としていて、ガリラヤ湖畔に集う人々をイメージさせる大規模な合唱によるフーガ¹⁹です。長いメリスマを用いていることで救世主を「待ち望む」(wartet)期待感や、食物を「集める」(sammlen)人々の様子などが伺われます。

第2曲 レチタティーヴォ(バス)

通奏低音²⁰のみの伴奏によるセッコ・レチタティーヴォで、全能の創造主を讃えます。

第3曲 アリア(アルト) 変口長調 3/8拍子

オーボエを伴った舞曲風のリズムで歌われます。一年の全てを満たして下さる主の恵みを喜びます。

第4曲 アリア(バス) ト短調 2/2拍子

前曲の後に説教が行われ、ここからは第2部となります。冒頭のこのアリアでは新約聖書の「マタイによる福音書」第6章31～32節を歌詞として、飲み食いに関して心配することはない、と歌いかけます。バロック時代にはイエスの言葉はバスが担当するのが常でした。

第5曲 アリア(ソプラノ) 変ホ長調 4/4拍子・3/3拍子・4/4拍子

全ての生き物の命を約束する神への信頼と喜びを、アダージョで装飾性に富むオーボエとソプラノの旋律で歌い、中間部では「思い煩いよ、去れ」との決心が表明されます。

第6曲 レチタティーヴォ(ソプラノ)

ここまでの教えをまとめるように歌われる、伴奏付きレチタティーヴォです。

第7曲 コラール(合唱) ト短調 3/4拍子

H. フォーゲル²¹による食卓用のコラールを4声体で歌って、食せることへの感謝の祈りを捧げてしめくりとします。

《イエスよ、あなたは私の魂を》BWV 78はバッハが39歳の時の作品です。この年(1723年)、バッハはライプツィヒにおけるカンタータ第2年巻の作曲に取

パンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるでしょうか。」5イエスが「パンは幾つあるか」とお尋ねになると、弟子たちは、「七つあります」と言った。6そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、七つのパンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、人々に配るようにと弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。7また、小さい魚が少しあったので、讃美の祈りを唱えて、それも配るようと言われた。8人々は食べて満腹したが、残ったパンの屑を集めると、七籠になった。9およそ四千人の人がいた。イエスは彼らを解散させられた。10それからすぐに、弟子たちと共に舟に乗って、ダルマスタの地方に行かれた。

18 「セッコ・レチタティーヴォ」とは、通奏低音のみで伴奏されるレチタティーヴォで、記譜されている音価よりも言葉のリズムを優先して歌われます。響きが厚くないのでイタリア語で「乾いた叙唱」と呼ばれました。

19 「フーガ」とは、ある声部に現れた旋律を他の声部が追いかけて模倣するような様式のことです。

20 「通奏低音」とは、楽曲において上の旋律を持続的に支える低音パートのことをいいます。「ゲネラルバス」や「バスソコンティヌオ」とも言います。

21 Hans Vogel (1525-1567)。ルードルシュタットのcantorなどとも勤めた人のようです。



り組みました。この年巻の特徴はコラール・カンタータの形式をとっていることです。

コラール・カンタータとはドイツ・プロテスタント音楽の伝統的な作曲手法なのですが、バッハの作品には次のような特徴があります。まず第1曲はコラールの第1節を歌詞とし、大規模な合唱ながらその中にコラール旋律が定旋律として歌われています。また終曲は簡素な4声体のコラールです。その中間楽章は独唱(レチタティーヴォやアリア)で、コラールの歌詞を改変しながら作詞されることが多く、コラール旋律は明確には示されないけれどもそれを思わせる音楽が聴かれる部分もあります。

このカンタータの歌詞はJ. リスト^[注22]の同名のコラールが使われています。三位一体後第14日曜日用のカンタータで、この日は「らい病を患っている十人の人をいやす」^[注23]が説教のテーマでした。歌詞は一貫して「私」(ich)、第2曲では「私たち」(wir)というように一人称の視点です。体や心を病み鬱ぎ込み信仰を失いかける「私」が救いを求める、そのような歌詞の世界を音楽化しているように思います。

第1曲 コラール(合唱) ト短調 3/4拍子

受難の悲しみを表すラメント・バス^[注24]とよばれるテーマの上で合唱の下3声部が先導して動きを

持って歌い出します。そこにソプラノが長い音価でコラール定旋律を加えます。救いが見えるあたりから、活気に満ちたリズムと音型が現れます。

第2曲 二重唱(ソプラノ、アルト) 変口長調 4/4

「弛みない足取り」を表す小気味よい通奏低音に乗って、イエスのもとへと急ぐ喜びや、救いへの期待を歌います。

第3曲 レチタティーヴォ(テノール)

自分の罪をさらけ出し、罪を認め、そしてイエスに依り頼むことを告白するセッコ・レチタティーヴォです。

第4曲 アリア(テノール) ト短調 6/8拍子

フルートのオブリガートを伴って歌われます。「戦い」(Streite)の激しいメリスマと「(イエスが自分の側に)立って下さる」(stehet)の引き延ばされた音の対照が聴かれます。

第5曲 レチタティーヴォ(バス)

弦楽伴奏付きのレチタティーヴォです。歌詞の表す情緒を弦楽伴奏が多彩に表現します。「恐ろしい裁き」(erschreckliches Gericht)は「Vivace」と指定され、恐れおののく音型が使われています。内省するところには「Adagio」、主への帰依を表明するところは「Andante」と記されています。

22 Johann Rist (1607-1667)。ハンブルク生まれでH. シュッツとも知り合いだった牧師のようです。

23 「ルカによる福音書」第17章第11～19節には次のように記されています。

11 イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。12 ある村に入ると、らい病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、13 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。14 イエスはらい病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。15

その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を讃美しながら戻って来た。16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。17 そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。18 この外国の人のほかに、神を讃美するために戻って来た者はいないのか。」19 それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

24 「ラメント・バス」とは、半音階的に下降していく音型で、バロック時代には「悲しみ」の情緒を表現するときに用いられました。

第6曲 アリア(バス) ハ短調 4/4拍子

アルマンド風^[注25]のテーマをもつ器楽を伴って、主への信頼と救いの確信を歌います。器楽伴奏はまるでオーボエ協奏曲のような構造をしています。動きの多い旋律のなかで「永遠」(Ewigkeit)の語だけが長く引き延ばされて強調されています。

第7曲 コラール(合唱) ト短調 4/4拍子

簡素な4声体のコラールです。第1曲でソプラノによって明示されたコラール定旋律にバッハが和音付けを行ったものです。「私」という一人称で歌われますが、コラールですから会衆の共同の祈りとなります。

《天の王よ、汝をむかえまつらん》BWV 182は宮廷楽師長就任後、最初のカンタータです。いわばヴァイマルでの宮廷楽師長デビュー作品です。その年の3月25日、受難節^[注26]の最後の日曜日である「棕櫚の日曜日」^[注27]のために作曲されました。この日の礼拝では、「イエスのエルサレム入城」の記事^[注28]が説教のテーマでした。

音楽面の特徴から「ダ・カーポ形式研究」とも呼ばれています。というのは第2、5、8曲が完全なダ・カーポ形式^[注29]で作られていて、第3、6曲も後奏として前奏に回帰するという共通点があるからです。

第1曲 ソナタ ト長調 4/4拍子

弦楽のピッツィカート和音の間を、付点のリズムをもった独奏ヴァイオリンとフルートが進みます。「天の王」がろばに乗ってエルサレムに入城する様子を表しています。

第2曲 合唱 ト長調 4/4拍子

冒頭から始まる順列フーガが次第に厚みを増してくことで、棕櫚の葉を振りながら「天の王」を歓迎する群衆の歓びが表現されています。バッハが合唱曲にダ・カーポ形式を採り入れた最初の作品です。

第3曲 レチタティーヴォ(バス)

歌詞は「詩篇」第40篇の預言者の言葉です。再臨を告げるこの言葉をキリスト(救世主)の言葉としてバスに語らせています。

第4曲 アリア(バス) ハ長調 4/4拍子

栄光の玉座から離れ受肉し身を犠牲とすることで

25 「アルマンド」とは、フランス語で「ドイツ風の」舞曲を意味しました。上拍で始まる4拍子で穏やかなすり足の踊りだったそうです。

26 「受難節」とは、キリストが苦難を受け入れたことを思い起こして礼拝を守る期節です。40日間続くので「四旬節」と呼んだり、レント(Lent)と呼んだりします。

27 なぜ「棕櫚の日曜日」と呼ばれているかというと、イエスが弟子たちと共に最後にエルサレムの町に入ってきたとき、エルサレムの市民や子どもたちが棕櫚(ナツメヤシ)の枝を持って振りながらイエスを飲んで迎え入れたからです。その日から事態は受難に向けて動きだし、5日後の聖金曜日にイエスは十字架にかけられたとされています。

28 「マタイによる福音書」第21章第1～9節には次のように記されています。

1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つからないであり、一緒にろばのいるのが見つかる。それをほどいてわたしのところに引いて来なさい。3 もし、だれかが何か言ったら、「主がお入り用なのです」と言いなさい。すぐ渡してくれる。」4 それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

5 「シオンの娘に告げよ。

『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、
柔和な方で、ろばに乗り、
荷を負うろばの子、ろばに乗って。』

6 弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、7 ろばとろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8 大勢の群衆が自分の服を道に敷き、

キリストとして世を救う、そこに至らせた「愛の強さ」をハ長調の晴れやかな曲想で表現します。

第5曲 アリア(アルト) ホ短調 4/4拍子

信仰をもつ人々は救い主に帰依しなさい、と「ひれ伏し」を表す下降音型のフルートを伴って人々に呼びかけます。中間部ではより積極的になり、ダ・カーポして再び浸み入るように「ひれ伏し」を呼びかけます。

第6曲 アリア(テノール) 口短調 4/4拍子

受難の光景を眼前にしながらもイエスへの追従を語ります。器楽伴奏は通奏低音ですが音楽は激しく、情念に満ちています。通奏低音の楽譜中には多くの「#」(シャープ)が付いています。ドイツ語では「#」を“Kreuz”つまり「十字架」と同じ言葉で呼びます。ですから十字架を象徴していると見ることができます。

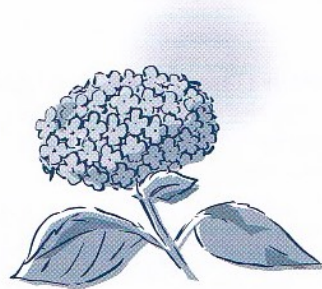
第7曲 コラール(合唱) ト長調 2/2拍子

このコラールは前模倣のバッヘルベル様式^[注30]で作られています。16分音符の細かい動きによって受難が喜びとして表現され、コラール定旋律に沿

うフルートの響きが天上を想わせます。

第8曲 合唱 ト長調 3/8拍子

全編の最後にあたって、再び冒頭の喜ばしい雰囲気^[注31]に回帰します。歓喜に踊る軽快なリズムや透明な響きに満ちています。しかし曲中では「受難」(Leiden)や「道」(Bahn)といった言葉の強調も行われ、カンタータ中間部での思索がふり返られます。歌詞中の「サレム」とはエルサレムの略で天上の都を指します^[注32]。そして再びダ・カーポして冒頭の響きを回復し、喜びをもって音楽を閉じます。



また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。9そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。

「ダビデの子にホサナ。

主の名によって来られる方に、祝福があるように。

いと高きところにホサナ。」

10 イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。11そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。

29 「ダ・カーポ形式」とは、冒頭部分Aが中間部分Bの後に繰り返される様式です。A-B-Aの3部形式です。

30 「前模倣」および「バッヘルベル様式」とは、コラールを用いた楽曲において各行の旋律を他の声部が先取りして模倣的に歌い合う様式です。定旋律はソプラノにあります。

31 旧約聖書の『詩篇』第76篇には次のようにあります。

「神はユダに御自らを示され

イスラエルに御名の大きいなることを示される。

神の幕屋はサレムにあり

神の宮はシオンにある。」

歌詞対訳

BWV 18 Gleichwie der Regen und Schnee vom Himmel fällt (Kantate zum Sonntag Sexagesimae)

1. Sinfonia

2. Rezitativ (Baß)

„Gleichwie der Regen und Schnee vom Himmel fällt
und nicht wieder dahin kommet,
sondern feuchtet die Erde
und macht sie fruchtbar und wachsend,
daß sie gibt Samen zu säen und Brot zu essen:
Also soll das Wort, so aus meinem Munde gehet, auch sein:
es soll nicht wieder zu mir leer kommen,
sondern tun, das mir gefällt,
und soll ihm gelingen, dazu ich 's sende.“

3. Rezitativ (Tenor und Baß) und Litanei (Chor)

Mein Gott, hier wird mein Herze sein:
Ich öffne dir 's in meines Jesu Namen;
So streue deinen Samen
Als in ein gutes Land hinein.
Mein Gott, hier wird mein Herze sein:
Laß solches Frucht, und hundertfältig, bringen.
O Herr, Herr, hilf!
O Herr, laß wohlgelingen!
Du wollest deinen Geist und Kraft zum Worte geben;
Erhör uns, lieber Herre Gott!
Nur wehre, treuer Vater, wehre,
Daß mich und keinen Christen nicht
Des Teufels Trug verkehre.
Sein Sinn ist ganz dahin gericht',
Uns deines Wortes zu berauben
Mit aller Seligkeit.
Den Satan unter unsre Füße treten.
Erhör uns, lieber Herre Gott!
Achl! viel verleugnen Wort und Glauben
Und fallen ab wie faules Obst,
Wenn sie Verfolgung sollen leiden.
So stürzen sie in ewig Herzeleid.
Da sie ein zeitlich Weh vermeiden.
Und uns für des Türken und des Papsts
Grausamen Mord und Lästerungen,
Wüten und Toben väterlich behüten.
Erhör uns, lieber Herre Gott!

雨や雪が天から降ると同じように 《復活祭前第8日曜日のためのカンタータ》

1. シンフォニア

2. レツィタティーフ (バス)

「まるで雨や雪が天から降っては
そこに戻らずに、
大地を湿らせ
実りと生長もたらして、
蒔く人には種を、食べる人にはパンを与えてくれるように、
私の口から出る言葉も、またそうだ。
空しく私に戻ることなく、
私の意に適うことを行い、
私が送った目的を果たす」

(『イザヤ書』第55章10節～11節)

3. レツィタティーフ (テノールとバス) と連祷 (合唱)

私の神よ、ここに私の心があります、
私はこれを自分のイエスの名においてあなたに開きます。
どうかあなたの種を撒いてください
良い土地に撒く時のように。
私の神よ、ここに私の心があります。
そのような実りを、百倍に、もたらしてください。
どうか主よ、主よ、救ってください！
どうか主よ、栄えさせてください！
あなたは自分の霊と力を言葉に与えようとしてくれます。
私たちの祈りを聞いてください、愛する主なる神よ！
どうか防いでください、誠実な神よ、防いでください、
私を、そしてどんなキリスト者も
悪魔の偽りが変えてしまわないように。
悪魔の意志はただこの事に向かっています、
私たちからあなたの言葉を
あらゆる幸福と一緒に奪う事に。
サタンが私たちの足元に踏みじられるようにしてくれます。
私たちの祈りを聞いてください、愛する主なる神よ！
ああ！多くの人が言葉と信仰を否定し
腐った果実のように墮落していく、
彼らが迫害に悩む時には。
そうやって永遠の心の苦悩に陥ってまでも、
つかの間の悲しみを避けようとするのだ。
そして私たちをトルコとローマ教皇の
残酷な殺戮と神への冒涇から、
怒りと猛りから父親のように護ろうとしてくれます。
私たちの祈りを聞いてください、愛する主なる神よ！

Ein anderer sorgt nur für den Bauch;
Inzwischen wird der Seele ganz vergessen;
Der Mammon auch
Hat vieler Herz besessen.
So kann das Wort zu keiner Kraft gelangen.
Und wieviel Seelen hält
Die Wollust nicht gefangen?
So sehr verführt sie die Welt,
Die Welt, die ihnen muß anstatt des Himmels stehen,
Darüber sie vom Himmel irgehen.
Alle Irrige und Verführte wiederbringen.
Erhör uns, lieber Herre Gott!

4. Arie (Sopran)

Mein Seelenschatz ist Gottes Wort;
Außer dem sind alle Schätze
Solche Netze,
Welche Welt und Satan stricken,
Schnöde Seelen zu berücken.
Fort mit allen, fort, nur fort!
Mein Seelenschatz ist Gottes Wort.

5. Choral

Ich bitt, o Herr, aus Herzens Grund,
Du wollst nicht von mir nehmen
Dein heiliges Wort aus meinem Mund;
So wird mich nicht beschämen
Mein Sünd und Schuld, denn in dein Huld
Setz ich all mein Vertrauen:
Wer sich nur fest darauf verläßt,
Der wird den Tod nicht schauen.

Erdmann Neumeister 作

3: [Martin Luther 作の連祷]

5: [Lazarus Spengler 作のコラール]

《Durch Adams Fall is ganze verderbt》第8節]

またある人はお腹のことばかり心配しているが、
その間魂はまったく忘れ去られている。
マモンもまた
多くの人の心を占めてきた。
それで言葉が全く力を持ってないでいるのだ。
一体どれだけの魂が
快樂に取り込まれないでいるのだろうか？
それほどひどく魂を世は誘惑している、
世が、魂にとって天の代わりとなり、
そのために魂は天から迷い出してしまうのだ。
あらゆる誤りと誘惑を改めようとしてくれます。
聞き入れてください、愛する主なる神よ！

4. アリア (ソプラノ)

私の魂にとっての宝は 神の言葉。
それ以外のすべての宝は
網のように、
世とサタンが仕掛けたものであり、
汚れた魂をたぶらかそうとしているのです。
すべて去りなさい、さあ 去ってください！
私の魂にとっての宝は 神の言葉なのです。

5. コラール

私は願っています、ああ 主よ、心の底から、
あなたが私から取り上げようとしないうことを、
私の口から出るあなたの神聖な言葉を。
それで私を辱めることはないでしょう
この罪と咎も。なぜならあなたの恩寵に
私はすべての信頼を置いているのですから。
それだけを堅く信じている人、
その人が死にあうことはないでしょう。

BWV 187
Es wartet alles auf dich
(Kantate zum 7. Sonntag nach Trinitatis)

Erster Teil

1. Chor

Es wartet alles auf dich,
daß du ihnen Speise gebest zu seiner Zeit.
Wenn du ihnen gibest, so sammeln sie,
wenn du deine Hand auftust,
so werden sie mit Güte gesättiget.

2. Rezitativ (Baß)

Was Kreaturen hält
Das große Rund der Welt!
Schau doch die Berge an, da sie bei tausend gehen:
Was zeuget nicht die Flut?
Es wimmeln Ström und Seen.
Der Vögel großes Heer
Zieht durch die Luft zu Feld.
Wer nähret solche Zahl,
Und wer
Vermag ihr wohl die Notdurft abzugeben?
Kann irgendein Monarch nach solcher Ehre streben?
Zahlt aller Erden Gold
Ihr wohl ein einig Mal?

3. Arie (Alt)

Du Herr, du krönst allein das Jahr mit deinem Gut.
Es träufet Fett und Segen
Auf deines Fußes Wegen,
Und deine Gnade ist' s, die allen Gutes tut.

Zweiter Teil

4. Arie (Baß)

„Darum sollt ihr nicht sorgen noch sagen:
Was werden wir essen,
was werden wir trinken,
womit werden wir uns kleiden?
Nach solchem allen trachten die Heiden.
Denn euer himmlischer Vater weiß,
daß ihr dies alles bedürft.“

皆 あなたを待ち望んでいます
《三位一体の祝日後第7日曜日のためのカンタータ》

第一部

1. 合唱

皆あなたを待ち望んでいます、
あなたが皆に食べ物を時に応じて与えるのを。
あなたが皆に与えると、彼らはそれを集め、
あなたがその手を開くと
彼らは恵みで満ち足りるでしょう。

(『詩編』第104編27節～28節)

2. レツィタティーフ (バス)

被造物たちを護っている、
世の大いなる環が！
山を見てみよ、そこに彼らは幾度も行ったが、
何か大河を示さないものがあるだろうか？
川と湖であふれている。
鳥は大きな群れで
空を渡って野へ向かう。
誰がこれほどの数を養い、
また誰が
彼らに十分な必需品を分け与えることができるだろう？
どんな君主がこれほどの栄誉を求められるだろう？
あらゆる大地の金を
彼が一度に払えるだろうか？

3. アリア (アルト)

主よ、あなたは独り自分の宝でもってこの年を飾ります。
香油と祝福が
あなたの進む路上に滴り、
あなたの恵みは、あらゆる人に善いことをしてくれます。

第二部

4. アリア (バス)

「だから心配して言うべきではない、
『何を食べようか？』
『何を飲もうか？』
『何を着ようか？』と。
そのような物はどれも異邦人たちが求め努めているものだ。
あなたたちの天の父は分かっているのだから、
それらがすべて あなたたちに必要なことを」

(『マタイによる福音書』第6章31節～32節)

5. Arie (Sopran)

Gott versorget alles Leben,
Was hienieden Odem hegt.
Sollt er mir allein nicht geben,
Was er allen zugesagt?
Weicht, ihr Sorgen, seine Treue
Ist auch meiner Eingedenk
Und wird ob mir täglich neue
Durch manch Vaterliebs Geschenk.

6. Rezitativ (Sopran)

Halt ich nur fest an ihm mit kindlichem Vertrauen,
Und nehm mit Dankbarkeit, was er mir zugedacht,
So werd ich mich nie ohne Hülfe schauen,
Und wie er auch vor mich die Rechnung hab gemacht.
Das Grämen nützt nicht, die Mühe ist verloren,
Die das verzagte Herz um seine Notdurft nimmt;
Der ewig reiche Gott hat sich die Sorge auserkoren,
So weiß ich, daß er mir auch meinen Teil bestimmt.

7. Choral

Gott hat die Erd schön zugericht',
Läßts an Nahrung mangeln nicht;
Berg und Tal, die macht er naß,
Daß dem Vieh auch wächst sein Gras;
Aus der Erden Wein und Brot
Schaffet Gott und gibt's uns satt,
Daß der Mensch sein Leben hat.

Wir danken sehr und bitten ihn,
Daß er uns geb des Geistes Sinn,
Daß wir solches recht verstehn,
Stets nach sein Geboten gehn,
Seinen Namen machen groß
In Christo ohn Unterlaß:
So sing'n wir recht das Gratias.

Rudolstadt 詩華撰による

7: [Hans Vogel 作のコラール

《Singen wir aus Herzensgrund》第4.6節]

5. アリア (ソプラノ)

神はあらゆる生き物を世話します、
この世で息をしているものを。
神がすべての人に約束した事を、
私だけに与えてくれないことなどあるでしょうか？
去りなさい、不安よ、神の誠実が
私の唯一考えられるものであり、
それは日々私にとって新しくなります、
たくさんの父としての愛情ある贈り物を通して。

6. レツィタティーフ (ソプラノ)

私がひたすら堅く神に子供のような信頼を寄せ
神が私に与えてくれたことに感謝をするなら、
それで私は自分に救いがないとは決して思わず、
神が私のためにどれほど清算してくれたか知るでしょう。
悲しみは無益に、心労は無駄になります、
それは弱気な心が必要とするもの。
永遠の富める神が不安を取り払ってくれました、
分かっています、神が私の取り分も定めてくれているのは。

7. コラール

神は大地を美しく整えました、
暮らしに欠くことがないように。
山と谷には、雨をもたらし、
それで家畜のための草は育つことができます。
大地からワインとパンを
神は造り、それを私たちに十分に与え、
それで人間は生きることができるのです。

私たちは神に大変感謝し、祈ります、
神は私たちに霊の意志を与えてくれるのですから、
私たちはそれを正しく理解し、
いつもその命令に従って歩み、
その名を偉大なものにするのですから
キリストのもとで、絶えず。
そうやって私たちは正しく「感謝の祈り」を歌うのです。

BWV 78
Jesu, der du meine Seele
(Kantate zum 14. Sonntag nach Trinitatis)

1. Chor

Jesu, der du meine Seele
Hast durch deinen bitteren Tod
Aus des Teufels finstern Höhle
Und der schweren Seelennot
Kräftiglich herausgerissen
Und mich solches lassen wissen
Durch dein angenehmes Wort,
Sei doch itzt, o Gott, mein Hort!

2. Arie (Duett: Sopran und Alt)

Wir eilen mit schwachen, doch emsigen Schritten,
O Jesu, o Meister, zu helfen dir.
Du suchest die Kranken und Irrenden treulich.
Ach höre, wie wir
Die Stimmen erheben, um Hülfe zu bitten!
Es sei uns dein gnädiges Antlitz erfreulich!

3. Rezitativ (Tenor)

Ach! ich bin ein Kind der Sünden,
Ach! ich irre weit und breit.
Der Sünden Aussatz, so an mir zu finden,
Verläßt mich nicht in dieser Sterblichkeit.
Mein Wille trachtet nur nach Bösen.
Der Geist zwar spricht: ach! wer wird mich erlösen?
Aber Fleisch und Blut zu zwingen
Und das Gute zu vollbringen,
Ist über alle meine Kraft.
Will ich den Schaden nicht verhehlen,
So kann ich nicht, wie oft ich fehle, zählen.
Drum nehm ich nun der Sünden Schmerz und Pein
Und meiner Sorgen Bürde,
So mir sonst unerträglich würde,
Ich liefre sie dir, Jesu, seufzend ein.
Rechne nicht die Missetat,
Die dich, Herr, erzürnet hat!

4. Arie (Tenor)

Das Blut, so meine Schuld durchstreicht,
Macht mir das Herze wieder leicht
Und spricht mich frei.
Ruft mich der Höllen Heer zum Streite,
So stehet Jesus mir zur Seite,
Daß ich beherzt und sieghaft sei.

イエスよ、あなたは私の魂を
(三位一体の祝日後第14日曜日のためのカンタータ)

1. 合唱

イエスよ、あなたは私の魂を
自らの辛い死によって
悪魔の暗い洞穴から
重い魂の苦しみから
力強く救い出し、
私にその事を分からせてくれました、
自らの心地よい言葉で。
どうか今こそ、おお 神よ、私の守護者でいてください!

2. アリア (ソプラノとアルトの二重唱)

私たちは急ぎます、弱くとも、たゆまぬ足取りで、
おおイエスよ、おお 師よ、救いを求めてあなたのもとへと。
あなたは病人やさまよう人々を誠実に探してくれます。
ああ聞いてください、どんなに私たちが
声を上げているか、救いを願って!
あなたの恵み深き顔が私たちを喜ばせてくれますように!

3. レツィタティーフ (テノール)

ああ! 私は罪の子だ、
ああ! 私はあてどもなくさまよっている。
罪の腫れ物が、私の中にあり、
この死ぬべき身の私から去ろうとしない。
私の思いは 悪いことばかり望んでいるのだ。
確かに霊は語る。「ああ! 誰が私を救ってくれるのだろうか?」
けれども肉と血を制すること
そして善を果たすことは、
私の力のすべてでも及ばない。
たとえ私がこの欠陥を隠そうとしなくても、
私にはできない、自分にどれほどの過ちがあるか、数えることは。
だから私はいまや この罪の痛みと苦しみを取り除き
自分の不安の重荷を降ろす、
そうしないと私には耐えられなくなるから。
私はそれをあなたに渡します、イエスよ、嘆きながら。
悪事を数え上げないでください、
あなたを、主よ、怒らせてきた悪事を!

4. アリア (テノール)

この血が、私の咎を消し去り、
私の心を再び軽くして
私のことを公に語ってくれる。
私を地獄の軍勢が戦いへと呼び出しても、
イエスが私の側にいて、
私を勇気づけ、勝利を確信させてくれるのだ。

5. Rezitativ (Baß)

Die Wunden, Nägel, Kron und Grab,
Die Schläge, so man dort dem Heiland gab,
Sind ihm nunmehr Siegeszeichen
Und können mir verneute Kräfte reichen.
Wenn ein erschreckliches Gericht
Den Fluch vor die Verdammten spricht,
So kehrst du ihn in Segen.
Mich kann kein Schmerz und keine Pein bewegen.
Weil sie mein Heiland kennt;
Und da dein Herz vor mich in Liebe brennt,
So lege ich hinwieder
Das meine vor dich nieder.
Dies mein Herz, mit Leid vermenget,
So dein teures Blut besprenget,
So am Kreuz vergossen ist,
Geb ich dir, Herr Jesu Christ.

6. Arie (Baß)

Nun du wirst mein Gewissen stillen,
So wider mich um Rache schreit,
Ja, deine Treue wird's erfüllen,
Weil mir dein Wort die Hoffnung beut.
Wenn Christen an dich glauben,
Wird sie kein Feind in Ewigkeit
Aus deinen Händen rauben.

7. Choral

Herr, ich glaube, hilf mir Schwachen,
Laß mich ja verzagen nicht;
Du, du kannst mich stärker machen,
Wenn mich Sünd und Tod anficht.
Deiner Güte will ich trauen,
Bis ich fröhlich werde schauen
Dich, Herr Jesu, nach dem Streit
In der süßen Ewigkeit.

作者不詳

Johann Rist 作のコーラル
《Jesu, der du meine Seele》による

1: [第1節]

3: [第3.4.5節]

5: [第10節]

7: [第12節]

5. レツィタティーフ (バス)

傷、釘、冠、そして墓、
殴打、それがあの時 救い主に与えられましたが、
それらは 主にとってはいまや勝利の証であり
私に新しい力を与えてくれるのです。
恐ろしい裁きが
神罰を永遠の罰を受けた者たちの前で述べる時も、
あなたはそれを祝福へと変えてくれます。
私をどんな痛みもどんな苦しみも動揺させることはありません、
それを私の救い主は知っているのですから。
そしてあなたの心は私のために愛に燃え、
それで私は再び
自分の心をあなたの前に横たえるのです。
この私の心を、苦悩と共に混ぜ合わせ、
あなたの貴い血を注ぎます、
十字架で流された血を。
そしてあなたに捧げます、主 イエス・キリストよ。

6. アリア (バス)

いまやあなたは私の良心を静めてくれます、
私に対する復讐を叫ぶ良心を。
そう、あなたの誠実さが果たしてくれるでしょう、
私にあなたの言葉が希望を与えてくれるのですから。
キリスト者たちがあなたを信じるなら、
彼らをどんな敵も、永遠に
あなたの手から奪うことはないでしょう。

7. コラール

主よ、私は信じています、私の弱さを助け、
私がひるまないようにしてください。
あなたは、私を強くすることができるのですから、
私を罪と死が動揺させる時にも。
あなたの慈しみを私は信頼します、
私が喜んで眺めるまで、
あなたの姿を、主 イエスよ、戦いが終わった後
甘き永遠の中で。

BWV 182
Himmelskönig, sei willkommen
〈Kantate zum Sonntag Palmarum〉

1. Sonata

2. Chor

Himmelskönig, sei willkommen,
Laß auch uns dein Zion sein!
Komm herein,
Du hast uns das Herz genommen.

3. Rezitativ (Baß)

„Siehe, ich komme,
im Buch ist von mir geschrieben;
deinen Willen, mein Gott, tu ich gerne.“

4. Arie (Baß)

Starkes Lieben,
Das dich, großer Gottessohn,
Von dem Thron
Deiner Herrlichkeit getrieben,
Daß du dich zum Heil der Welt
Als ein Opfer vorgestellt,
Daß du dich mit Blut verschrieben.

5. Arie (Alt)

Leget euch dem Heiland unter,
Herzen, die ihr christlich seid!
Tragt ein unbeflecktes Kleid
Eures Glaubens ihm entgegen,
Leib und Leben und Vermögen
Sei dem König itzt geweiht.

6. Arie (Tenor)

Jesu, laß durch Wohl und Weh
Mich auch mit dir ziehen!
Schreit die Welt nur „Kreuzigel“,
So laß mich nicht fliehen,
Herr, von deinem Kreuzpanier;
Kron und Palmen find ich hier.

天の王よ、歓迎します
《棕櫚の日曜日のためのカンタータ》

1. ソナタ

2. 合唱

天の王よ、歓迎します、
私たちがあなたのシオンとしてください！
入って来てください、
あなたは私たちの心を受け取ってくれました。

3. レツィタティーフ (バス)

「見よ、私は来る、
書物に私のことは記されている、
「あなたの意志を、私の神よ、私は喜んで行く」と」
〔詩編〕第40編8節～9節

4. アリア (バス)

強く愛すること、
それがあなたを、神の子よ、
あなたの栄光の座から
駆り立てたのです、
あなたが自分を世の救いのために
捧げ物とするほどに、
あなたが白らを血を流しながら捧げるほどに。

5. アリア (アルト)

自分を救い主の下に据えなさい、
心よ、あなたたちがキリスト者ならば！
あなたたちの信仰の
汚れなき衣を救い主に届け、
体と命と力を
王に今こそ捧げなさい。

6. アリア (テノール)

イエスよ、幸福な時も不幸な時もずっと
私もあなたと共に連れて行ってください！
世が「十字架につける！」と叫ぶばかりでも、
どうか私が逃げずにいられるようにしてください、
主よ、あなたの十字架の旗印のもとから。
冠と棕櫚の葉を私はここに見出すのです。



7. Choral

Jesu, deine Passion
Ist mir lauter Freude,
Deine Wunden, Kron und Hohn
Meines Herzens Weide;
Meine Seel auf Rosen geht,
Wenn ich dran gedenke.
In dem Himmel eine Stätt
Uns deswegen schenke.

8. Chor

So lasset uns gehen in Salem der Freuden,
Begleitet den König in Lieben und Leiden.
Er gehet voran
Und öffnet die Bahn.

7. コラール

イエスよ、あなたの受難は
私にとって まがいなき喜び、
あなたの奇跡、冠、嘲りが
私の心の牧場です。
私の魂はバラの岡へと向かいます、
私とその事を思い出す時には。
この天での居場所を
それゆえに私たちに贈ってください。

8. 合唱

さあ喜びのサレムへと行きましょう、
王に付き従いなさい、愛と苦しみの中で。
彼は先を進んで
道を開いてくれるのです。

(仙台宗教音楽合唱団：若林敦盛)

Salomo Franck 作

7: [Paul Stockmann 作のコラール
《Jesu Leiden, Pein und Tod》第33節]



ヨハネ受難曲演奏会
ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
東京バッハ・カンタータ・アンサンブル
(2007.1.28 岩手県民会館)

“ヴァインシャーマンの気持ち”

佐々木 正 利

ヘルムート・ヴァインシャーマン。戦中戦後を通じて世界を代表するオーボエ奏者。アムステルダム・コンサートヘボウ管弦楽団（創立100年を迎えた1988年よりロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団と改称）の首席オーボエ奏者としてウィルム・メンゲルベルクやオイゲン・ヨッフムといった巨匠から絶大な信頼を受け、30代後半にはデットモルト北西ドイツ音楽大学の教授となり、ギュンター・パッシン、ゲアノート・シュマールフス、宮本文昭ら、幾多の優秀な弟子を輩出、またドイツ・バッハゾリステンを立ち上げ世界のトップ室内オーケストラに育て上げたのは周知のことである。

このヴァインシャーマン先生は1920年の生まれですから、私事で恐縮ですが私の父（1919年生まれ、2003年没）と同世代、何と88歳の今も矍鑠として精力的に指揮活動をなさっておられます。私たちが先生と初めて共演させて頂いたのが1991年のことですから、もう17年経ちました。それより遡ること5年前の1986年には、先生のオーボエでクリスマス・オラトリオのソロを歌わせて頂きました。何故、このソロのことを書いたかは後に理由を記します。

昨年1月に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下フェラインと略）は創立30年を記念して、ヴァインシャーマン先生をお招きし、バッハのヨハネ受難曲を演奏しました。この演奏会は手前味噌での言い方を許して頂けるならフェラインの歴史の集大成とも言うべき、金字塔の名演だったと思います。恐らくそれもあって、フェラインは11月にヴァインシャーマン先生指揮による、世界的室内オーケストラ、水戸室内管弦楽団（略称：水戸管）の定期演奏会に招かれ、ゴールドベルク変奏曲（ヴァインシャーマン編曲合唱付き管弦楽版）の合唱を担ったのです。小沢征爾が音楽監督を務める水戸管は、定演の度に招集される内外のトップ級ソリストたちによって編成され数々の名演を披露してきましたが、何と合唱と共演するのは初ということで、雑誌『音楽の友』にも取り上げられた程の話題を醸し出した演奏会でした。私も会場で聴きましたが、開演前には会場のあちこちから「水戸管が合唱を入れるなんて！…」とか「何で盛岡の合唱団なの？…」といった声が聞かれ、フェラインの登場は必ずしも好意的には受け取られてはいなかったようです。しかし、そうした声も終演後には雲散霧消、スタンディングオベーションを伴う万雷の拍手で称えられたのは嬉しいことでした。

この水戸での折りに、私はヴァインシャーマン先生から一連の包みを渡されます。その中には数曲の楽譜が入っていました。そして先生曰く「来年の11月、大フィル（大阪フィルハーモニー交響楽団）を振りに日本に行くから、その時にまた演奏会をしよう」。このお申し出は私にとって二重の喜びをもたらしました。一つはフェラインがまだまだ先生に信頼されているのだということ。そしてもう一つは、先生が90歳にならんとしてもまだまだ前向きに音楽に対峙しようとしている姿勢を見せられたことです。前者については、私も水戸管との共演を聴いていて、一流のソリストたちを向こうに回し、フェラインも結構やるじゃん！、と感心したものでしたし、後者については30歳以上も年長なのに先生のパワーの源は何なのだ！、と私もまだまだ老けてはいけなさと自らを叱咤激励したものでした。

ここで唐突に話を変えます。私はヴァインシャーマン先生の悲しそうなお顔を二度ほど見たことがあります。一つは1994年、翌年に控えた「ヨハネ受難曲」の演奏に備えて先生の本のご自宅に打ち合わせに出掛けた時のこと。何を思ったか、私は先生にこう尋ねてしまいました。先生、先生はもうオーボエは吹かないのですか、と。そうしたら74歳の先生は、オーボエ奏者にとって唇、前歯、歯茎の衰えは致命傷なんだよ、と悲しそうにお答えになられました。それでも先生は何ってみますと60代半ばまでは演奏していたとのこと、これは私の一つの目標となりました（最前に先生のオーボエとの共演に触れたのはこの理由からです）。因みに先生の高弟の一人である宮本文昭さんは57歳でオーボエを置いていらっしゃいます。それからみたら先生は怪物ですし、私とて57歳にならんとしているけれどまだまだ現役歌手にこだわりは持っています。

さて先生のもう一つの悲しそうなお顔。それは最前の水戸でのお話をフェラインがお断りしてしまった時のお顔です。実際にはドイツにおられる先生にお断りの報を入れましたので直接お顔は拝見していませんが、私には先生の落胆した心が手に取るように分かります。多分、フェラインには絶対に断られるとは思っていなかったに違いありませんか

ら、寂寞の情は察して余りあるものがあります。しかしフェラインにもどうしようもない事情がありました。その事情というのは、既に2010年1月に、ヴィンシャーマン先生と並び世界のバッハ演奏史に巨匠として名を残すであろうヘルムート・リリングの指揮で「ロ短調ミサ曲」をすることがほぼ決まっていたからです。何しろその時に77歳になるリリングは、その年度、即ち2010年3月をもって全ての演奏活動から引退するというのですから。ましてや日本での共演団体にフェラインを指名してきたのですから尚更これはやらねばなりません。若い頃、リリングの音楽に憧れ、その指導を受けにシュトゥットガルトに渡り、ついには彼の主宰するバッハ・アカデミーのマスター・クラスの講師を2年も務め、彼の指揮で「マタイ受難曲」や数々のカンタータのソロを歌った私としては、自分の手兵合唱団が彼の手で指揮されるというのは、残った唯一の夢でした。思えば2005年、希代の名エヴァンゲリストで、近年は指揮者としても勇躍名を馳せているペーター・シュライアーが、歌手としての活動を「マタイ受難曲」の振り歌いで閉じた時も、私の合唱団が合唱を受け持ち幸せな時を過ごしたものでしたが、リリングの最後にも巡り合わせられるなんて何という幸運なことでしょう。と、有頂天になってヴィンシャーマン先生の有り難い申し出を反古にしてしまったことが果たして良いことだったのか…。

最近頃に思うことがあります。それは当たり前のことですが、フェラインはアマチュアであるということです。団員はみなそれぞれ仕事や学業に勤しみ、その余暇を利用して合唱をしています。確かに2005年の12月ドイツで、4日間のうちに「メサイア」「クリスマス・オラトリオ」「第九」をそれぞれ別のオーケストラと共演したり、2007年12月には盛岡でマーラーの「復活」をした翌々日、台北で「クリスマス・オラトリオ」を演奏したりといったアマチュアらしくない離れ業を見せてくれたフェラインですが、基本的には〈下手〉〈自腹〉〈ノンプロ〉がベースになっています。結局、活動自体や実態だけを見ていると妙な錯覚に捕われることもあります。下手だから練習期間を長く取らねばなりませんし、すべて自腹なので経済的裏付けが取れるまで次の演奏活動の期間を先延べしなければなりません。またノンプロが故、一週間休みを取って演奏旅行に出掛ける訳にもいきません。そんな訳で、本日(6月1日)の演奏会後、半年でヴィンシャーマン先生と演奏会を迎えるというのは無理がありますし、ましてや難曲「ロ短調ミサ曲」をもってのリリングとの共演が待っているのですから、ここはしっかり準備期間を取ろうということに相成った訳です。

今日のプログラムはフェラインの原点である珠玉のカンタータ集です。30年以上も活動を続けてきますとネタは尽きそうなものですが、そこはバッハ、まだまだ取り上げていないカンタータが百数十曲残っています。とは言ってもフェラインのメンバーも毎年代替わりする訳ですから、本来は名曲中の名曲は再演されてしかるべきではありません。その辺が私たちの言わば贅沢な悩みとなっています。贅沢な悩みといえはもう一つフェライン特有のものがあります。それは、本日のソリストは全員自前なのですが、実は起用された人たち以外にもソロを担える輩が沢山いて、正直人選に困りました。またフェラインには、私以外に指揮を担える人材が少なくとも18名はおります。これらの人々はかつて(や現在も)合唱指揮に携わった(ている)人たちですが、フェラインでは1手兵として熱心に合唱に参加しています。そんな彼らを思う時、頼もしく有り難い反面、そろそろ道を譲らなくてはいけないかなと思ったりもします。でも本当は何が良いかは分かりません。独唱活動では結構潔く後進に道を譲る決断ができたのに指揮活動では迷います。何故なら指導ではまだまだやり残したことがあると思っているからです。問題は、それらの実践や実験はフェラインじゃなくとも良いかという自分があることです。私がそんな顔を見せた時は遠慮なくお叱り下さい。そんな理由で退くな!、と。

今日はヴィンシャーマン先生のお気持ちを咀嚼して我がことに照らしてみました。先生からすれば無用な付度でしょうが、初めて先生とお会いした30年前の、先生の年齢になったからこそ、その時点からの先生の思いの足跡を我が足下に照射しながら真摯な音楽活動を続けていきたいと思っています。先生に負ける訳には参りませんが、ってね。

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年に結成以来「J.S.バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、30年間活動を続けてきました。主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

年 月 日	演 奏 会 名	曲 目	指 揮 者 等
1977年	2月27日	「カンタータを歌う会」として発足	
	6月28日	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称	
1978年	2月26日	「バッハコンツェルト」	カンタータ45番、147番 指揮：小林道夫 (芸大と共演)
1979年	10月 6日	「BACH ABEND」	カンタータ 158番、131番 指揮：小林道夫
1980年	2月27日	「バッハの夕べ」	カンタータ80番 指揮：小林道夫 (芸大と共演)
	12月22日	この年より「チャリティー・コンサート」を、盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催(～1997年)	
1981年	7月 4日	「BACH ABEND」	カンタータ 195番、182番 指揮：小林道夫
1982年	11月22日	「バッハの夕べ」	カンタータ 158番、4番 指揮：佐々木正利
1985年	3月16日 17日	J.S.バッハ生誕 300年記念演奏会 「ヨハネ受難曲」	ヨハネ受難曲 指揮：佐々木正利 (仙台宗教音楽合唱団と合同演奏)
	11月 3日	仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル) 指揮：佐々木正利
	11月29日	G.F.ヘンデル生誕 300年記念演奏会「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル) 指揮：佐々木正利
1986年	4月11日	「宗教音楽の夕べ」	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか 指揮：佐々木正利
	4月～5月	第1回ドイツ演奏旅行	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか 指揮：佐々木正利
	7月11日	「東京ゾリステン演奏会」共演	スターバト・マーテル (ベルゴレージ) 指揮：赤松 安
1987年	3月28日	創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」	カンタータ34番、70番、102番ほか 指揮：佐々木正利
	11月27日	ムシカ・アラルテ・トウキョウ演奏会 「バロック音楽の夕べ」(主催)	
1988年	3月12日 13日	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会 「ミサ曲口短調」	ミサ曲口短調 指揮：佐々木正利
	9月17日	「今仲幸雄バリトンリサイタル」(主催)	
	11月17日	「ミヒヤエル・ショッパーパーバリトンリサイタル」(主催)	
1989年	4月24日	「二重合唱の夕べ」	モテット2番、5番 (J.S.バッハ)ほか 指揮：佐々木正利
1990年	3月10日 11日	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、 仙台宗教音楽合唱団合同演奏会	クリスマス・オラトリオ4～6部、 ミサ曲へ長調(J.S.バッハ) 指揮：佐々木正利
	10月 1日	「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」(主催)	
	12月～ 翌1月	第2回ドイツ演奏旅行	クリスマス・オラトリオほか 指揮：C.ポッペン 佐々木正利
1991年	3月10日	ドイツ演奏旅行帰国演奏会	モテット1、2番(J.S.バッハ)ほか、 ブクステフーデ、シュッツ 指揮：佐々木正利
	10月14日 18日	「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」	カンタータ140番、コーヒーカンタータ 指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
1992年	3月 2日	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」	カンタータ93番ほか 指揮：佐々木正利



1992年	3月 2日	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」	カンタータ93番ほか	指揮：佐々木正利
1993年	10月20日 24日 29日	「マタイ受難曲」(盛岡、仙台、岡山、東京)	マタイ受難曲(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
1994年	7月25日	「カンタータ147番」 仙台バッハアカデミーに出演	カンタータ147番	指揮：佐々木正利 (仙台フィル・バッハアンサンブルと共演)
	12月18日	弘前市民クリスマス： G.F.ヘンデル「メサイア」演奏会に出演	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1995年	4月末～ 5月	第3回ドイツ演奏旅行	天地創造(J.ハイドン)ほか	指揮：ヨセフ・ツィルヒ 佐々木正利
	8月26日	一関・東日本合唱祭参加	モテット6番ほか	指揮：佐々木正利
	9月26日	剣持清之・トリオフィオーレ 「モーツァルト室内楽の夕べ」(主催)		
	10月 8日	青山町教会チャペルコンサート	天地創造抜粋(J.ハイドン)ほか	指揮：小原一穂
	11月22日 23日	「天地創造」(盛岡、仙台) オーケストラ・アンサンブル金沢と共演	天地創造(J.ハイドン)	指揮：岩城宏之
	1996年	3月15日	「バッハの夕べ」演奏会	カンタータ21,131番、モテット4番
1997年	4月13日	20周年記念演奏会	昇天祭オラトリオ マニフィカトほか(J.S.バッハ)	指揮：H.J.ロツチュ 佐々木正利
1998年	11月20日	「ヴィンシャーマンの口短調ミサ」演奏会 盛岡コーロ・テラ・パーチェと共演	ミサ曲口短調(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
	12月12日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	カンタータ151番,191番 讃美歌数曲	指揮：佐々木幹雄
1999年	4月20日	シュッツのダビデ詩篇と バッハ、メンデルスゾーン のモテットの夕べ	ダビデ詩篇曲3曲 モテット3番(J.S.バッハ) モテット3曲メンデルスゾーン	指揮：佐々木正利
	11月11日 12日 14日	第4回ドイツ演奏旅行 ケンペン・プロブスタイ教会 ボン・ベートーヴェンホール インゲルハイム・ザール教会	ミサ曲口短調(J.S.バッハ) ダビデ詩篇曲3曲 モテット3番(J.S.バッハ) モテット3曲メンデルスゾーン	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演) 指揮：佐々木正利
	12月22日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	モテット、三つの宗教的な歌ほか(メンデルスゾーン) オルゲルビューヒライン(J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利
	2000年	11月23日	クリスマス・オラトリオ全曲演奏会	クリスマス・オラトリオ(J.S.バッハ)
2001年	3月13日	「盛岡いのちの電話」開局10周年記念 チャリティーコンサート	十字架上のイエス・キリストの七つの 言葉(シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	8月11日 12日	岡山バッハカンタータ協会主催ドイツ演奏旅行 に有志(24人)同行参加 ライプツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊席 クヴェトリンブルグ・シュティフツ教会	カンタータ39番,102番,158番, モテット6番(J.S.バッハ)	指揮：D.ティム (ライプツィヒ・バロック オーケストラと共演)
	10月16日	クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会	交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	在京のバイオリン合奏団 と共演
2002年	1月13日	25周年記念演奏会	モテットOp.29,74(ブラームス) カンタータ150番,184番,39番(J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利 (東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演)
	10月 4日	ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会	カンタータ45番(J.S.バッハ) グローリア 二長調(ヴィヴァルディ)	指揮：D.ティム (ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演)
	12月 3日	嘸海真希子さん追悼演奏会	ヨハネ受難曲から第39,40曲 (J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利



2002年	12月22日	久慈・こはくのみち第九演奏会	交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮：石川善美 東北大学交響楽団 久慈市民楽団合唱団と共演
2003年	11月30日	マタイ受難曲演奏会盛岡公演	マタイ受難曲 (J.S.バッハ)	指揮：H.ヴァインシャーマン (ドイツ・バウハウスリステンと共演)
	12月 5日	マタイ受難曲演奏会東京公演	マタイ受難曲 (J.S.バッハ)	指揮：H.ヴァインシャーマン (ドイツ・バウハウスリステンと共演)
2004年	7月	仙台宗音、岡山バッハカンタータ協会、高知バッハカンタータフェライン主催のドイツ演奏旅行に有志(38人)参加	カンタータ131番、21番 (J.S.バッハ)	指揮：D.ティム (ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演)
	28日	アイゼナツハ・聖ゲオルク教会演奏会		
	30日	アイスレーベン・聖アンドレアス教会演奏会		
	31日	ライプツィヒ・聖トーマス教会演奏会		
2005年	1月30日	マルコ受難曲演奏会	カンタータ106番、79番、105番 マルコ受難曲 (J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利
	4月15日	シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団盛岡公演 (盛岡バッハ・カンタータ・フェライン共演)	羊飼いの歌ほか(メンデルスゾーン) アヴェ・マリアほか(シューベルト) 婚礼の合唱ほか(ワーグナー) 流浪の民(シューマン) 赤とんぼ(山田耕筰)	指揮：佐々木正利 ロルフ・ベック
	12月 27日 28日	第5回ドイツ演奏旅行 ミュンヘン・ヘラクレスザール グラーフィング・シュタットプファール教会	メサイア/ドイツ語版(ヘンデル) クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部 (J.S.バッハ)	指揮：G.シュマルムフス
	30日	デットモルト・ノイエアウラ	交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	
2007年	1月28日	ヨハネ受難曲演奏会	ヨハネ受難曲 (J.S.バッハ)	指揮：H.ヴァインシャーマン (東京バッハ・カンタータ・アンソングルと共演)
	6月 3日	飯舘子・佐々木正利ジョイントリサイタル (主催)		
	12月21日	盛岡市民文化ホール開館10周年記念 マーラー「復活」演奏会 合唱団として出演した「復活公演祝祭合唱団」に 有志98人が参加	交響曲第2番「復活」 (J.S.バッハ)	指揮：飯森範親 (東京交響楽団と共演)
	12月23日	台湾「クリスマス・オラトリオ」演奏会 長楽交響楽団：主催 仙台宗教音楽合唱団、岩手大学 合唱団と共に有志25名が参加	クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部 (J.S.バッハ)	指揮：G.シュマルムフス (長楽交響楽団と共演)

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティー・コンサート、チャペル・コンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。

珠玉のカンタータ演奏会スタッフ

マネージャー	トータル	茂木 容子	対 訳	若林 敦盛
	チーフ	渡辺 信之 (印刷)	楽 譜	李沢 有希・大崎 孝子
	サブ	高橋 美織	受 付	鈴木勇二・佐藤澄江・佐々木聡子
	学生リーダー	志賀友加里	楽 屋	原 穂波・大崎 孝子
会計	全 般	赤塚 貴史・犬亦 敦子	ステージ	田沢 隆・藤原 広大
	チケット販売	尾友佳子・鹿糠朋加・平野亘	事務局	新宮 央子
渉外	お客リスト	千田 絵未・吉田 智徳	印 刷	三澤印刷
	広 告	高橋 美織・大嶋美奈子	録 音	I B C 開発センター
印刷	P R	志賀友加里	録 画	近藤敏行・石垣美和・高橋和人
	デザイン	後藤彩都子 (チラシ、ポスター)	写 真	カメラのキクヤ
	構 成	茂木史・佐藤美彩穂・米内恵里奈	宿泊協力	盛岡グランドホテルアネックス

《合唱団出演者》

【ソプラノ】

青柳奈津子 ●赤塚 温子 ○阿久津 巴 荒田 奈美 大崎 孝子 大嶋美奈子 大矢 克子
小笠原香澄 岡野美映子 尾友 佳子 小原 育世 鹿糠 朋加 金成 佳枝 菊地明日香
菊池 節子 古川 亜湖 斎藤 純子 佐々木恵利子 志賀友加里 高橋 知子 高橋はるか
○高橋 美織 田中 結香 ●田村いずみ 千田 絵未 角掛 友喜 奈良めぐみ 成田 和代
村元 彩夏 本良いよ子 矢幅 嘉子 山口 恵利

【アルト】

赤野 真美 ○阿部 一葉 伊藤 結香 犬亦 敦子 ★小川 暁美 小野寺洋子 柿崎 泉
金子 千鶴 ●菊池 葉子 桐原 絹子 佐々木美智子 佐藤 公 佐藤美彩穂 ○新宮 央子
須川加奈子 鈴木 英美 李沢 有希 田口千紗都 武田 敏恵 多田 繭子 丹野 まり
中野 和子 原 穂波 平井 良子 三宅真佐子 茂木 史 茂木 容子 谷地敬晶子
●吉田 智穂 米内恵里奈 渡辺しをり

【テノール】

及川 豊 太田 穎則 小川 隆弘 鏡 貴之 柿崎 幸史 柿崎 倫史 ○勝部 健作
加藤 進也 佐々木朋也 ★佐々木幹雄 佐藤 賢 ◇新山 隆健 ●西野 真史 ○沼田 臣矢
目黒 賢哉 ●吉村 哲

【バス】

赤塚 貴史 ●阿部 学 稲生 創 ★小原 一穂 今野 勝彦 佐々木直樹 佐藤 和久
高橋 聡 高橋 啓 田沢 隆 千田 敬之 芳賀 郁夫 ○平野 亘 藤村 誠毅
○藤原 広大 ●横山 泉 渡辺 信之

指揮者：佐々木正利 伴奏者：剣持 清之

★ コンサートマスター / ミストレス ● パートリーダー
◇ アシスタント・コンダクター ○ サブパートリーダー

♪ 団員募集 ♪

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、団員を募集しています。
合唱が好きな方、年齢、経験問わず歓迎いたします。
お気軽に見学にいらしてください。

◆練習日時：毎週火曜日午後6時半～9時/毎月1回日曜日午後1時半～5時

◆練習場所：盛岡市内丸教会

(盛岡中央郵便局から与ノ字橋方向へ、1つ目の信号手前右側角)

◆練習曲目：J.S.バッハ/ロ短調ミサ BWV232

◆お問合せ：渡辺 信之 TEL 019-665-1614

◆E-mail：mail@mbkv.jp

